

最近、食の分野に限らず、化学物質の危険性に関する警鐘を「煽動」と評して、化学物質蔓延の現状を肯定するような論評を目にする機会が多くなった。そうした論評は以前の論評とは様子が違っている。そこでは、「絶対に安全なものはない」《天然物にも毒性がある》《専門家が十分にチェックしている》等の論理が用いられ、「毒性がある／ない」論争を避け、「毒性と言っても大したことない」と主張する。しかも、食の安全を気づかう消費者の側に立っていると自らは思っているような人がこういう論評を書いているのである。そこに私は問題の根深さを感じる。

生協で長い間仕入れ担当者だったという渡辺宏氏が書いた『「食の安全」心配御無用!』(朝日新聞社)にはこういう事が書いてある。

遺伝子組み換えで耐虫性をもったじゃがいもの葉を食べた虫が苦しみながら死んでいく「衝撃映像」を見せて、危険な食べ物だと騒ぐのも同じです。害虫を殺すためにわざわざ遺伝子を組み換えているわけですから、むしろ死なないと困るわけです。…(省略)…

私は遺伝子組み換えには反対ですが、こうした実験と、人間への毒性というのは、まったくべつの次元の話だということは強調しておきたいと思います。

こういう宣伝をする人たちは以前から、ダイオキシン、環境ホルモン、遺伝子組み換え作物、電磁波など、ありとあらゆる「危険」を総動員して、消費者をおどすことを続けてきました。

渡辺氏は別のところで、遺伝子の自然界への拡散の恐れや組み換え技術の独占によって一部企業が世界農業を支配する恐れ、また生命の神秘に触れる行為への違和感を述べて、遺伝子組み換えに反対している。

生命の神秘に触れる行為への違和感を感じながら、それよりも科学的な判断を優先させていて、それが「冷静な」判断だと思っているわけである。虫が食べてコロコロ死ぬ物に危険を感じるのは当然ではないか。そういう感性がある科学者がいて初めて、研究がされ、毒性が明らかになる。そして、渡辺氏のように自らは科学的思考をしていると信じているが、科学的知識を限定的に見れない、実は非科学的な人が、科学者にも多いのである。

渡辺氏は半数致死量(試験に用いた動物の半数が死亡する量)で判断すると保存料のソルビン酸よりも食塩の方が毒性が強く、ソルビン酸が危険視されるのはおかしいと言っている。

急性毒性や単独摂取の毒性だけが問題ではない。慢性毒性や他と関連した場合の毒性について、どう研究されているのだろうか。研究されなければ毒性は明らかにはならない。

人は食塩を無闇に食べるわけではない。多く取り過ぎれば、ノドが渴いて水を飲む。食塩は主に塩化ナトリウムであるが、カリウムはナトリウムの排泄を促す。カリウムの多い野菜サラダとナトリウムの多いドレッシングという組み合わせを好むように、人はなっているのである。

ソルビン酸に対応する機能を人は備えているのだろうか。登山用や災害時などの非常食に使われる程度なら問題ないかもしれないし、必要な場合もあるだろう。しかし日常的に使われているのである。渡辺氏が品質管理がなおざりにされた安易な使用を批判しているように、現状におけるソルビン酸の使用状況は社会にとって「毒」なのである。渡辺氏は「べつの次元」の話だと反論するかもしれないが、人が生きる事は全て一体である。

天然物にも毒がある。人類は身の回りの天然物に対応する知識や知恵を受け継いで来ている。附子(トリカブト)は殺人に使われる程の猛毒であると同時に、冷えを主体とする病に効く良薬である。同じ「毒」と言っても、化学物質の毒とは質を異にする。

人間は自然内の存在であるが、同時に自然と対立する人工物を作る。鳥の生産物である巢やフンは自然の循環の中で消滅していくが、近代的な科学技術による生産物の中にはいつまでも残留し、自然の恒常性を危うくしている物がある。消滅しやすい物は親和性が高く、いつまでも残留する物は親和性が低い。親和性が高くても多量に生産されれば、自然の循環を危うくする。自然との親和性が低い物は、同時に人のからだへの親和性も低く、科学的な毒性の判定を待つまでもなく、「毒」と考えるべきではないか。そうした知恵を常識とすべき時代が来ているのではないか。

(2003年6月夏至)